

JSJ 卒業生インタビュー「佐渡島庸平さん×伊藤弘毅さん（ともに 1994 年度の卒業生）」

日) 2023 年 2 月 8 日 (水) 07:00~08:00 日本時間

於) Zoom オンライン

見出し：

激動の南アフリカで過ごした中学時代——。
日本から遠く離れた異空間で触れてきたのは限られた情報と大自然、そして多様な人。
そのなかで育まれた思考や感性は、その後の人生に大きな影響を及ぼした——。

————— 南アフリカから日本に帰国後、ともに灘高、東大に進み、その後も社会の最前線でご活躍を続けるヨハネスブルグ日本人学校（以下「JSJ」または「日本人学校」）卒業生のお二人に、当時の原体験や気づき、いま南アフリカに暮らす子どもたちへのエールなどを語っていただきました。

卒業生紹介

佐渡島 庸平（さどしま ようへい）さん：

1979 年生まれ。 JSJ に中学校 1 年生から 3 年生まで在籍後（1992 年 4 月～1994 年 7 月）、灘高、東大を経て、大手出版社の講談社に入社。「ドラゴン桜」や「宇宙兄弟」というヒット作品の立ち上げを編集者として手掛けたのち、作家エージェント業という日本では新たな業態を手掛ける会社「コルク」を起業。従来の出版流通の先にあるインターネット時代に適したエンターテインメントの形を追求している。



伊藤 弘毅（いとう ひろたけ）さん：

1979 年生まれ。 JSJ に小学校 5 年生から中学校 3 年生まで在籍後（1990 年 6 月～1994 年 12 月）、灘高、東大を経て、現在は東北大理学研究科物理学専攻の助教として次世代通信技術や超高速演算に資する光物性物理、超高速レーザー分光測定の研究に取り組んでいる。



<以下、本文>

佐渡島 庸平さん：

1993年12月にネルソン・マンデラとデクラークが共にノーベル平和賞を受賞しました。アパルトヘイト体制を平和的に終結させ、新しい民主的な南アフリカの礎を築いたことでの受賞となりましたが、ちょうどその頃、僕たちは日本人学校に通う中学2年生でした。

当時の児童生徒数は小中学生を合わせて50～60名程度、南アフリカ全体の日本人数は500～600名でした。

ノーベル平和賞の受賞では「平和的に」という表現が使われているけれど、実際に住んでいたときの感想としては、治安は悪化の一途で、社会が不安定になってきている印象しかありませんでした。在学中には、日本人学校で国語を担当されていた吉村先生という方が現地で強盗事件に巻き込まれ亡くなってしまうというショッキングな出来事もありました。

その数か月後である1994年4月に南アフリカで初めてとなる全人種参加による総選挙があり、ご存知のとおりネルソン・マンデラが大統領に就任、日本人の間では、これからもっと治安が悪くなるから、一日も早く国を脱出した方が良いといった話もありました。

映画「インビクタス/負けざるものたち（2009年）」では、1995年5月に開催されたラグビーワールドカップ南アフリカ大会までが舞台になっていますが、僕はその前年の94年夏頃に日本へ帰国しました。高校受験が始まる1月には阪神淡路大震災が発生、いま振り返ると次々に大きい出来事が身の回りで起きていた感覚があります。

伊藤 弘毅さん：

私の場合は、少し庸平よりも滞在期間が長くて、正確には1990年6月から南アフリカにいました。小学校5年生から中学3年生の1994年12月までを現地で過ごしたことになります。1991年2月に、当時のデクラーク大統領が国会演説ですべてのアパルトヘイト法を廃止すると宣言、そこからは皆さんご存知のとおりで、いま振り返ると、確かに激動の南アフリカで多感な思春期時代を送っていたことにはなりますが、割と毎日の生活 自体は普通だった気がします。

——— お二人ともに南アフリカという一国の社会の価値観やあり方が逆転するという、いわば乱世的な環境のなかで思春期を過ごされていたというのは興味深いです。

佐渡島 庸平さん：

その状況が何か特別なものを生んだかといわれると、あまり関係ないように思います。勉強に関していえば、当時は本当に参考書のような教材が現地にはなく、どの家庭も放任主

義というか、親に勉強させられていたような子どもは一人もいませんでした。高校受験対策なども全くと言っていいほどしておらず、ただただ日本人学校の期末テストを集中して取り組んでいました。

ところが一度、全国模試を受ける機会があったときに、それまで見たことがないような成績を取ることができました。実は僕は、日本の中学受験に失敗したあと南アフリカに来ています。滞在中は、日本で塾に通っていた頃と比べると本当に勉強をしていなかったのもあってか、すごく驚きました。南アフリカから日本に帰国後、最初に受けた模試は大阪府で10位くらいになりました。その1か月後くらいに受けた模試は大阪府で1位でした。

伊藤 弘毅さん：

庸平は中学入学時に日本人学校に転校してきたのですが、いかにも都会からやって来た勉強のできる生徒という印象が強かったです。中学校時代の私にとって、庸平の存在は凄く良い刺激になっていました。

————— 佐渡島さんという、編集者として関わった「ドラゴン桜」という漫画での勉強法など有名ですが、なかでも教科書を徹底的に分かるまで勉強したら基礎がしっかりして応用問題もいつの間にか解けるようになっていたという話は印象的です。伊藤さんも同じように勉強されていたのでしょうか？

伊藤 弘毅さん：

はい。とにかく参考書は1冊か2冊しかありませんでしたし、教科書をベースにした勉強以外やりようがありませんでした。ただ、日本人学校の良いところだと思いますが、全国から選抜されてきた優秀な先生方が密着指導してくれるので、わからないところを都度、確認できたことは理解を深めるうえで大きく役立っていたのではないかと思います。

佐渡島 庸平さん：

暗記物とかであっても、教科書に載っていない内容は出題されないの、日本人学校の期末テストで十分にカバーされていました。

————— 灘高受験は、どのように決められたのですか？

佐渡島 庸平さん：

大きく二つあって、ひとつは実家のあった神戸から近かったこと。前述したように中学校

3年生の1月に阪神淡路大震災がありました。僕としては東京の高校を受験することも考えていたけれど、震災の影響で東京を受験しに行くことすら難しかったし、両親が家から近い学校を希望していました。もうひとつは、小学校6年くらいから中学～高校にかけて「沈黙」に代表される遠藤周作の作品をよく読んでいたのですが、灘高が彼の母校だったというのも興味を持ったきっかけでした。

伊藤 弘毅さん：

私の場合は、庸平に誘ってもらって、一緒に受験してみました。最初は、こんな自分が合格するわけない、という気持ちが大きかったのですが、周りの方々に背中を押していただき、結果、受かったという感じでした。

——— お二人の滞在されていた頃の南アフリカは激動期でしたし、価値観にも少なからず影響を及ぼしていたのではないかと思います。そんなお二人が無事に高校生活等で周囲に馴染むことはできたのでしょうか？

伊藤 弘毅さん：

帰国子女特有というか、少し戸惑いはあったように記憶していますが、そう時間は掛からなかったと記憶しています。

佐渡島 庸平さん：

僕自身は親が転勤族だったこともあって、幼少期から新しいコミュニティに飛び込むことは何度も繰り返していたから、慣れというか、戸惑いはなかったです。

南アフリカで生活していた頃、日本の情報が本当に限られていて、父親の会社の出張者が持ってくる雑誌などを楽しみにしていました。いま考えると、あの情報に対する渴望というか飢えみたいなものは貴重なことだったんじゃないかと思います。

伊藤 弘毅さん：

当時、私たちの手元に入ってくる本や雑誌というのは、ある程度、大人によって厳選されていたものだと思います。その分、質の担保された良質な情報を、じっくりと深く読み込んだことは思考力を培うという意味で良かったのだらうと感じます。今のようなインターネット社会では情報を事前に絞ることは難しいですし、貴重な環境だったのではないのでしょうか。

——— 今もそうですが、南アフリカでは日本人が少なく、圧倒的少数派（マイノリティ）として生活することが普通になります。アパルトヘイト当時、日本人は名誉白人として取り扱われていたという話も有名ですが、お二人は差別的な風潮や現象など、何かを目の当たりにしたり、或いは何かを感じ取ったりはありましたか？

佐渡島 庸平さん：

今ほとんどの日本人の方は Sandton 地区に住んでいると伺っていますが、僕らの頃は日本人学校近くの Linden や Victoria Park, Northcliff などに住んでいました。アパートメントのような家は皆無で、みんな庭付きの一軒家タイプに住んでいました。スイミングプールのある家が普通でしたし、なかにはテニスコートのある家もあった。もちろんメイドさんもいた。僕の家には、当時 Julia という名前のメイドが住み込みで働いていました。彼女は隣国ジンバブエの出身で、ご主人は白人の方に殺害されてしまった。祖国に残る家族へ仕送りをするために出稼ぎに来ていて、自分の子どもたちと会えない辛い状況のなか、慎ましやかに生活をしていました。

一方の僕は、そんな彼女のアイロン掛けした洋服を着たり、準備してもらった食事を摂ったりと、いわば彼女のサポートを受けることで何不自由のない生活を送ることができていました。一人の人間として見たときに、僕が彼女よりも偉いということは何一つないはずなのに、僕と彼女を分け隔てているものは一体何なのだろう？と子どもながらに違和感を抱いていたことを覚えています。

自分なりに差別というものについて深く考えようと思ったのか、中学2年生の文化祭で島崎藤村の「破戒」を現代風にアレンジした脚本を書いて、クラスの劇として披露したこともありました。ただ、いま仕事柄、新人作家と接することが多いけれど、同じような脚本を書ける人って少ないような気がしています。記憶が曖昧で、本当に中学時代の自分がそんなことをやっていたのかなという気にもなります。Julia のことでそういう気持ちが強くなったのか分からないですが、「破戒」の内容を深く理解したいという衝動は心の中にあっただけでしょうね。

伊藤 弘毅さん：

間違いなく庸平が自分で脚本を書いて、文化祭のクラスの出し物でやったよ（笑）。その劇を見て、感動して泣いている保護者もいたくらいだったから、凄かった。

当時、日本人学校では国際交流ということで現地校との交流が盛んでした。よくスポーツの試合をしたりしていて、バレーボール/バスケットボール/水泳/サッカーなど、忙しかったように思います。特に差別的な扱いを受けた記憶もなく、それが名誉白人としてなのかはよくわからないけれど、やっぱり国際交流から学ぶものは多かった気がします。

佐渡島 庸平さん：

僕の場合は、「英語を話せた方が良い」という父親のアレンジもあって、日本人学校の休み期間を利用して現地校に1か月通ったりしていました。最初は嫌だったけど、そこで思いがけず南アフリカの女子生徒に初恋したりして、もっと現地校に通う頻度を増やしたいって思ったことを覚えています。(笑)

——— お二人が通っていた頃との大きな違いとして、いま JSJ の児童生徒数は半分以下に減っています。今年度(2022年度)の期初は18名でのスタートでした。なかなか児童生徒数の増えにくい状況において、学校はこのままで良いのだろうかと少し不安になることもあります。

佐渡島 庸平さん：

僕には子どもが3人いて、上から小6、小4、小1なんですが、少人数の学校という意味では今の日本人学校と同じくらいの規模の学校に子どもたちが通っています。一年生から六年生を一緒にした縦割り学習も多くて、例えば Farm という授業では一日中、農作業を主体的にやらせるなど創意工夫を意識したカリキュラムになっています。その学校の特色で面白いのは、敢えて「教えない」「勉強させようとしない」こと。すると、生徒たちは自ら勝手に調べ始める。先生たちはその行為を支えることが主な役割になっていて、僕の子どもたちは沢山の学びを持ち帰ってきています。

伊藤 弘毅さん：

少数校のメリットは確実にあるはずで、加えて日本人学校には日本から選抜された優秀な先生たちが派遣されて来ますし、密着指導をして貰える。国際交流の機会は可能な限り増やせると良いと思いますが、人数が少なくても十分に素晴らしい学校だと思います。

——— ありがとうございます。ここからは、JSJの現校長である渡島先生から寄せられたお二人への質問に移りたいと思います。ひとつめは「南アフリカでの一番の思い出は何ですか?」というご質問です。

佐渡島 庸平さん：

選ぶのは難しいですが、「村上ファンド」で有名な村上世彰さんが当時、経産省から南ア大使館への出向で現地に住んでいて、テニスのダブルスの試合とかでよく僕の父親と組んで出場していました。その縁で、今でも村上さんとは交流があって、そういう繋がり面白

いなと思います。

伊藤 弘毅さん：

南アフリカでゲームセンターに行ったとき日本の格闘ゲームが置いてありました。そのとき画面上にカタ仮名が映されていたのですが、それを現地の人たちが全く読めていませんでした。私はそのときはじめて、「カタ仮名」が日本固有の文字であることを認識しました。他方、あるとき南アフリカで楽譜を手にとったとき、そこには日本で見る楽譜と同じ音符が使われていました。すべてのものが地域固有のものというわけではなく、あるものにおいては世界共通のものがあるということに改めて驚いたというか、自分にとって大きな発見だったことを覚えています。

佐渡島 庸平さん：

記憶の残り方がインテリだなあ・・・(笑)。あと、やっぱり国語を担当されていた吉村先生が現地で犯罪に巻き込まれて亡くなったことはショックでした。吉村先生が、当時の授業で僕たちに限られた単語をもとに20分以内で200文字くらいの小説をつくらせることをやっていたのですが、あの授業は僕の人生にとって大きな影響を与えてくれました。

————— 貴重なお話を頂戴し、ありがとうございます。2つ目の質問は、「南アフリカで暮らしている子どもたちへのエール」です。

佐渡島 庸平さん：

当時は僕たちも不安に思うことがないわけではなかったけど、やっぱり、南アフリカという国を思う存分に楽しんで欲しいな。例えば乗馬なんかも、日本でこのまえ経験したけど、定められたルートだけをゆっくり歩くような形で、南アフリカで味わったような臨場感というか面白さはなかった。

伊藤 弘毅さん：

Kruger 国立公園などもそうですが、大自然の色んなものに触れたことや見たこと、例えば乗馬でも上手くできた/できなかったはあるけれど、それも含めて色々な経験を積めたことは、その後の自分の人生では大きな自信に繋がったと思います。私も庸平のコメントに同意です。テニスなどのスポーツも南アフリカにいたときに沢山やりました。

————— ありがとうございます。3つ目の質問は、「小中学生にお勧めの書籍」です。

佐渡島 庸平さん：

何でも良いと思いますね。やっぱり漫画かな。是非「ドラゴン桜」を読んでください！

伊藤 弘毅さん：

宣伝になってる（笑）。やっぱりどの本が自分に合うかというのは人それぞれなので、できるだけ沢山の本に触れる、数をこなすということが大切だと思います。

——— ありがとうございます。校長先生からの最後の質問は、「外国に暮らして学んだことや良かったこと」です。

佐渡島 庸平さん：

総じて、日本では絶対にできない経験ができる環境は、良いことづくめだったと思っています。南アフリカで感じた孤独や淋しさ（日本から離れていることへの）、こういったマイナスのことも含めて、尊い経験でした。

伊藤 弘毅さん：

全てが良い経験で、全てが自分の糧になりました。振り返ってみると楽しい記憶がなく、どんなことでも楽しめるものだと思います。国際交流も含めて色々やってみると良いと思います。

——— お二人ともご多忙のところ本当にありがとうございました。JSJの児童生徒たちや南アフリカで暮らす子どもたちにもお二人のことを伝えて、幅広く質問など受け付けようと思っています。

佐渡島 庸平さん：

というか、直接話す機会をつくってもらって大丈夫ですよ。事前に分かっていたら日本人学校の時間に合わせた日本時間の夕方でも調整可能なので。

伊藤 弘毅さん：

私も、もちろん大丈夫です。

————— 温かいご提案を頂戴し、ありがとうございます。是非とも企画し、改めてご連絡しますので、引き続き、よろしくお願いいたします。

(聞き手/文) 2022 年度 JSJ 運営委員 金井